

「インテリジェントな地域づくり」のシンポジウム

(公法) 国際教養大学 (秋田)、(公財) はまなす財団(札幌)、(一法) 北海道東北地域経済総合研究所(東京)は10月20日、文化芸術交流センターで「人口減少社会でしなやかに再生する地域づくり」『レジリエントなコミュニティとは何か』と題して公開型研究会を開きました。



松岡町長、谷町長(中央右壇)、熊谷機構長(中央左壇の右)らが登壇したシンポジウム

国際教養大学アジア地域研究連帯機構、熊谷嘉隆機構長が「レジリエントな地域とは？」と題して基調講演。松岡市郎東川町長、谷一之下川町長が実践研究としてそれぞれの町づくりを発表しました。

熊谷機構長は「少子高齢化の日本の人口は、2100年までに5千万人を切り、83年後の人口は今の半分もない。その時、東川町は、北海道は、日本はどういうまちづくりをしていくのか。われわれに課された重い宿題だ」と問いかけました。

「2040年を境に、高齢人口が減り始めるが、この時期に生産年齢は高齢人口よりもはるかに早く減り始める。

東川援ソング「うちは地球のどまん中」コンサート

今後日本では消滅する地域、存続する地域がますますはつきりしてくるだろう」とレジリエントの必要性を取り上げました。

レジリエントとは、「負荷やショックにより影響を受けたものが元の形状に戻る力」と

町、東川町芸術招へい委員会は10月7日、文化芸術交流センターで歌手、加藤登紀子さんが書き下ろした東川応援ソング「ここは地球のどまん中」の発表コンサートを開きました。



演奏には東川中学校吹奏楽部約80人が参加してバックコーラスのレコーディングもしました。

この日登場したバックコーラスは、その名も「東川ソング合唱隊」。ラストソングとして大合唱が実現しました。

され、個性がある地域づくり、まちづくりの実例として写真の町や町立日本語学校を運営して写真文化と地方創生に取り組んでいる東川、森林の恵みを生かす取り組みをしている下川両町の取り組みを取り上げたそうです。

「100万本のバラコンサート」で、松岡市郎町長が町の応援ソング制作を依頼。その依頼に答えて加藤さんの作詞、作曲で完成した曲の初披露。今年7月、町内の女声コーラスグループ・みずほコーラス、町立東川日本語学校と旭川福祉専門学校の日本語留学生、

コンサートは1部、2部に分かれ、「百回百会」「百万本のバラ」のほか、北海道にまつわる歌として「時代遅れの酒場」「松花江」「わが人生に悔いなし」「知床旅情」など、ほかに代表曲の中から「愛の讃歌」「愛を耕すものたちよ」などを披露しました。

今年も楽しい！めだかクラブのハロウィーン

10月21日、地域交流センターでプレ英語クラブ、めだかクラブのハロウィーンパーティーが開かれました。4歳から小学6年生まで吸血鬼や魔女などに変装したお友だちが約150人集まりました。

4カ所のゲームを巡って紙のパーツを集め、フランケンシュタインの体を完成させるのが命題。「恐い」お化

け屋敷では、フランケンシュタインが横たわる手術台や墓地を巡りました。入り口には長蛇の列。



蜘蛛やコウモリのフェイス・ペインティング、蜘蛛飛ばしゲーム、障害物レースなど楽しいゲームがいっぱい。

校、東川高校の生徒合わせて40人が楽しいパーティーを演出してくれました。

「トリック・オア・トリート(お菓子をくれないといたずらするぞ)」と  
言ってチョコレート  
をゲット!

東川、旭川、東神楽、美深各町のALT(外国語指導助手)、CIR(国際交流員)と東川中学校